

- 8、『金剛三昧經論』下(大正三四、一〇〇七中下)。
- 9、『兩卷無量壽經宗要』(大正三七、一二五下)、『阿彌陀經疏』(大正三七、三四八上)にも、ほぼ同文の主張が見られる。
- 10、『起信論疏』上(大正四四、二〇二中)。
- 11、『大慧度經宗要』(大正三三、六八中下)。
- 12、同(同、七〇上中)。
- 13、『三国遺事』四(大正四九、一〇〇六上中)。金思燁訳『三国遺事』(昭和五十五年、大興出版)三四七―三五一頁参照。
- 14、『六十華嚴』五(大正九、四二九中)。
- 15、『菩薩戒本持犯要記』(大正四五、九一八中)。
- 16、同(同、九二一中)。
- 17、また、元曉撰と伝えられる『発心修行章』(『元曉全集』所収。蔡印幻『新羅佛教戒律思想研究』巻首に写真版を転載する)には、戒は空の天上に登るための梯^{はし}であり、破戒してから他のために福田となろうとするのは、翼を折った鳥が亀を背負って空を飛ぼうとするようなものである、といわれている。
- 18、『菩薩戒本』(大正二四、一一〇七上)。
- 19、『菩薩戒本持犯要記』(大正四五、九一八下)。
- 20、同(同、九二一中)。
- 21、『摩訶止観』四上(大正四六、四〇上―四二下)。
- 22、『正法眼蔵』第二七(七十五巻本)、『道元禪師全集』上、二四〇―二四五頁)。道元は、夢の中で夢を説くというあり方こそ、仏のさとりの世界を指しているという。

韓國僧伽の鉢盂供養作法について

梁 銀 容

目 次

- 一。はじめに
- 二。叢林の起居様式
- 三。供養処と作法道具
- 四。鉢盂供養の作法
- 五。結 び

一。はじめに

尊い三宝の中の僧、それは現実的に見ると、仏教の主体者である。つまり僧侶たちの仏陀慧命の伝灯により、生霊は仏恩に恵まれることができる。僧団の規範、あるいは一僧侶の一舉手一投足は、仏教の生きた象徴である。僧(Sangha)の意味が、衆・和合衆と訳されるのは周知の通りであるが、韓國では敬称の「saun」(和尚)に対し、通称して「jong」と呼んでいる。この「jong」とは「僧」の訓であって、「衆」の音に当たる。僧侶をつねに「衆」「僧徒」と見た韓國人の性格を窺い知るものである。「四部大衆」とは馴染み深い言葉であるが、韓國の寺院叢林でも、僧

侶に対し「大衆」あるいは「寺内大衆」をよく用いる。起居動作を大衆とともにする韓国僧侶の生き方が、今日の韓国寺院にそのまま残されていることがわかる。

こうした韓国寺院の伝統、あるいは僧侶たちの伝統的起居様式を代表するものとして、「鉢盂供養」が数えられる。供養とは「仏・法・僧三宝または死者の霊に諸物を供え回向すること」で、「敬・行・利の供養、仏・法・僧供養などがある」が、日本では仏前や死者の前に諸物を供え冥福を祈る意味で用いるのが通例である。

しかし韓国では、供養とは「①目上の人に飲食物を差しあげること。②仏前に供物を供えること。③僧が食事をすること。」と、仏前供養の他に、よく食事とくに僧侶のそれを「供養」と称するのである。それはもちろん僧に対する供養のことであるが、寺院では「食事」の代りに「供養」の言葉が使用される。僧侶の供養に应じるのが「供養する」という自動詞として成立するわけで、ここでの「鉢盂供養」をも僧侶の食事、すなわち鉢盂による食事を言う。

鉢盂(Batun)は鉢・盃・盂・応器・鉢多羅などとも訳され、韓国音では「Batun」(鉢盃)と読まれる。釈尊時からの伝統であるこの鉢盃食は、韓国寺院でよく守られ叢林大衆のもっとも重要な規範になっている。小さい草庵とか都市で過ごす僧侶に対して「Dolsan」(独暮らし)と呼び、僧侶の本分から離れたかのように見なすのも、ある意味では大衆生活による鉢盃供養のできない状態を責める言い方とも感じられる。韓国の僧侶たちが、自分らの伝統をどれほど大事にしてきたかを、この鉢盃供養を通じてよく了解できうる。

本稿では、こうした韓国仏教に生きている伝統的な鉢盃供養の作法をめぐって、寺院僧侶生活の一端を考えて見たい。

二. 叢林の起居様式

大寺院はよく「叢林」と呼ばれる。境内に禅院をはじめ、講堂(講院)・念仏堂・律院とか、宗務所などが備えられているからである。叢林の性格がもたら修行大衆の集合体であることを物語る。曹溪宗を代表とする韓国伝統仏教の教區本山は悉く叢林の形を取っており、その他の寺院をもこうした形態に準じて見るべきである。

換言すれば、韓国の伝統寺院が現在禅宗を名乗っているもの、必ずしも宗派的感覚に損べられるものではない。むしろ諸宗の要素を見いだすことのできる、通仏教的性格のものと言える。その教義学的性格は、「理釋」すなわち講院の学習科程³⁾からも窺える。

講院の學習科程は〈表一〉のように纏められる。この他に出家得度を志した者の修むべき日常勤行に関する各種礼文とか、『沙弥律義要略』や『梵網經』などを学んでいることは言うまでもない。講院で所定の科程を畢った後、禅院に入るのが一般的な例であるから、禅院でもっぱら坐禅を修める僧侶をも、一応教学基盤の形成過程を経て来たとしてよい。禅道場においても信仰儀礼の作法には、浄土教と見まちがえるほど浄土教的要素が濃く、久しい歴史の下で伝統化されたこれら儀礼作法に、疑問を抱く者はない。

〈表一〉講院の学習科程

理釈(科程)	科	目	期間
沙弥科	『誠初心学人文』(知訥撰) 『発心修行章』(元曉)	『自警文』(野雲) 『緇門警訓』	一年
四集科	『書状』(大慧宗果) 『禅源諸詮集都序』(圭峰宗密)	『禅要』(高峰原妙) 『法集別行録節要並入私記』(知訥)	二年

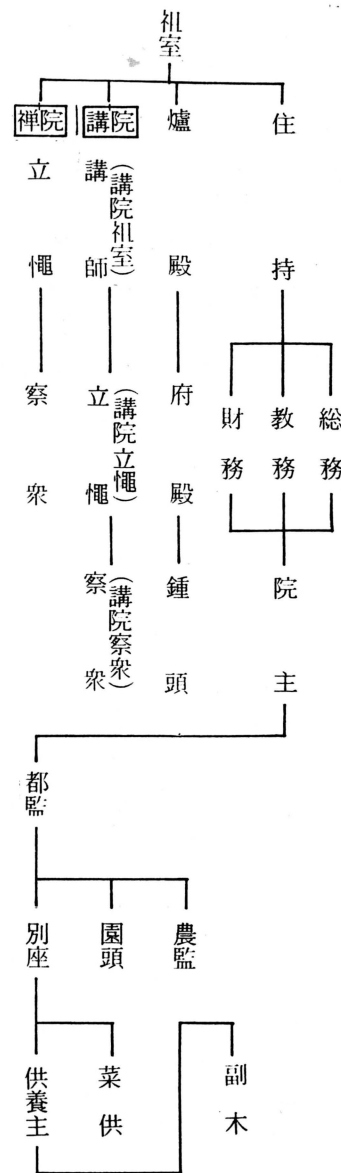
四教科	『楞嚴經』 『大乘起信論』 『金剛經』	四年
大教科	『華嚴經』	三年
随意科	『法華經』 『景德伝灯録』 『禪門拈頌』	

叢林はこれら諸要素が、前述の如き禅院・講院など、一定の形として整えられたところである。叢林には寺田などがあって、修行とともに自給自足の農耕作業が兼ねられる。冬夏の安居時のみでなく、結制時も解制時も四季同様に鉢盂供養が行われるのは、修行の大衆という叢林の性格から伝統化されたものと思われる。

叢林大衆の構成を人事機構（これを「所任」と言う）から見ると、大体（表二）のようになる。方丈の祖室和尚を象徴的存在とする叢林の組織は、全大衆を統率する禅院、学徒の講院、起居・儀礼を担当する府殿、寺院運営の実務を担当する住持以下の行政職（總務・教務・財務を「三職」と言う）と分けられる。

立働は禅院・講院を問わず、叢林の全大衆を統御する。察衆は「清規」「寺規」に基づいて、大衆の非行を監視

（表二）叢林の機構（所任）



し制裁を加える、監察の役に当たる。講院の組織が主に若い学僧を中心とする自体的なものであることを考慮すると、叢林大衆の構成は禅院が主体になっているのがわかる。

府殿は法堂侍奉者であり、その長を爐殿と呼ぶ。叢林の時間生活は爐殿の主導下で行われる。府殿は若干人、

鍾頭は普通二・三人として構成される。法堂での朝夕礼仏はもちろん鉢盂供養の作法をも爐殿の主管となる。

住持は行政上、寺の代表であり、中央の總務院から任命される。住持の下には三職が寺務を担当し、寺院運営の実務陣になっている。しかし、対内的な運営の実責任者は院主と言える。院主の下には都監・別座・供養主・菜供・副木がいる。さらに都監は園頭・農監を率いる。別座は厨房長格で、毎食供養の計画も、別座の所任である。

行政上の寺庵単位を中心とすれば、以上とは多少異なる見方があるかも知れない。しかし、叢林の構成は修行は本務となっており、行政上の問題は外部に対する形式とも見られる。いずれにしても、各種所住の有機的な関わりの中で叢林大衆の起居が規範化されるわけである。それを食生活で考えると、院主以下が用意をし、爐殿の執礼によって作法が修められる。

徹底した比丘・比丘尼大衆の叢林であるから、所任にはつねに修行の得力有無が問われる。中央で任命される住持や、長老側に当たる立働などを除いた府殿など若者の担当となる「任事」は、大体六ヶ月を一期とする。夏安居は旧暦四月十五日に結制して七月十五日に解制し、冬安居は十月十五日に結制して翌年正月十五日をもって解制する。結制時に所任にはいてから次期の結制までが一期となるのである。

叢林の修行日課は午前三時から始まる。その大綱を記すと次の通りである。

- ① 起寝。午前三時、府殿の「道場席」とともに大衆は起床し、寝具整理や洗面、そして法衣を備え、「鍾頌」の間に本堂に雲集する。

- ② 礼仏。四十分ないし一時間の朝の礼拝が修められる。

① 朝の精進。四時頃から二時間の精進修行が行われる。禅院では坐禅、講院では読經、念仏堂では念仏行が修められる。

② 朝供。六時から約三十分間の鉢盂供養がはじまる。朝食である。

③ 道場淨化。道場の掃除や自給自足のための集団労働がある。この集団労働を「大衆運力」と言う。

④ 午前精進。午前八時頃から二時間の精進。

⑤ 巳時供養。巳時すなわち午前十一時の仏前供養のことである。全大衆が本堂に雲集して作法が修められる。

⑥ 点心供養。法堂仏前の巳時供養の終わった時間からはじまる。中食である。

⑦ 午後精進。二時から二時間ぐらい。

⑧ 夕供。六時から行われる。夕食である。冬期には五時となるのが通例である。春分と秋分がその分起点になる。

⑨ 夕の礼仏。八時、大衆が本堂雲集して修められる。冬期には夕供のように一時間繰り上げられる。

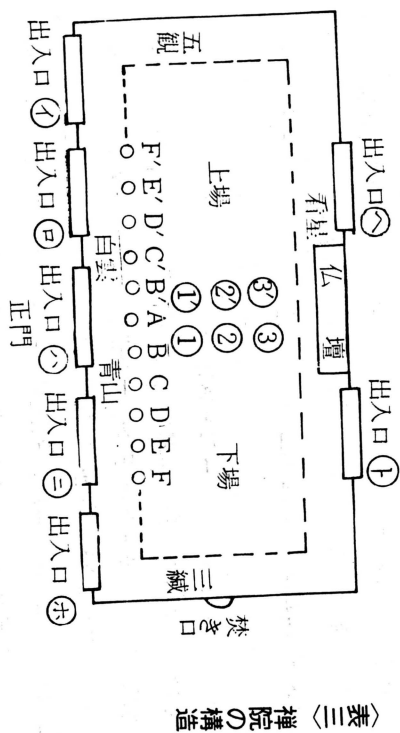
⑩ 就寝。九時をもって日課を修了する。

日課の進捗はおおよそ鍾声による。朝夕礼仏時は、梵鍾が各各三十三回と二十八回打鍾される。三十三天と二十八宿を象徴したものである。供養時は小鍾が五回鳴られる。

以上は平日の日課であり、法要のある日は多少変わってくる。いずれにしても、叢林大衆の四季の起居様式は、こうした日課に基づいている。一日三回の鉢盂供養の重みも、四季同様かつ叢林の大衆が一箇所に集り、供養作法そのものが修行日課として進められるところにある。

三. 供養処と作法道具

叢林大衆は普通、ほとんど禅院で起居する。つまり、禅院は修禅所であると同時に、居寝・供養処にもなるのである。この大衆の日課の大部分が行われる禅院は、叢林の「Keunbang」(大部屋)と呼ばれる。



禅院の構造を、供養作法をめぐって図示すれば、〈表三〉の通りである。出入口を中心とする外側は板敷きになり、部屋の内部は焚き口からの加熱で保温する装置のいわゆる「温突部屋」になっている。

〈表三〉のように、部屋は直四角型であり、正面に仏壇が設けられる。仏壇中央と正門(出入口①)側のAは一直

線になり、この線から左側を「Sangjang」(上場)、右側を「Hajang」(下場)と呼ぶ。焚き口をもととした呼び方である。他寺から禅院とか講院に入参した僧侶らが「上場」に、寺院の運営や各種所任についた当寺の僧侶らが「下場」に坐り、供養に応じることになる。それゆえ「上場」の大衆を「修行大衆」、「下場」の大衆を「本坊大衆」とも呼ぶ。供養時の座席は、〈表三〉のAを基準として、BCD、B'C'D'および点線になる。Aは祖室和尚の席であるが、それを中央として、B、C、D列の「上場大衆」と、B、C、D'列の「下場大衆」とが、法臘順に坐る。一列で坐れない場合は、二列になり向い合って坐る。〈表三〉でわかるように、正門内側の両柱には「白雲」・「青山」と墨書され、「上場」と「下場」の両壁には「五観」と「三緘」、そして仏壇左側の柱には「看星」と墨書されている。

「白雲」は祖室を象徴し、供養時の祖室和尚の席は、「白雲」と「青山」との中央(これを「於間」と言う)すなわちA席に定められる。従って、供養に応じる大衆は正門(出入口○)を避け、出入口④⑤⑥⑦を使用することになる。「三緘」は本寺大衆を意味する。屈己下心で口をとじ(三緘)最善を尽すことが強調される。「五観」とは「上場」の修行大衆を指す。すべてを修行に对照(五観)することが示される。

「看星」とは修行日課の進行者を意味し、伝来の星を観察して時間を測定した慣習から成立した用語である。法堂侍奉者の府殿・鍾頭らの席に当たる。この仏前をよく「Takjamt」(机の下)といい、若僧や沙弥僧らが坐ることになり、供養の準備や作法を手伝う。供養の準備などで使用する門は出入口①とおこび○である。出入口①に近い別舎から用意された供養物を、禅院に運び作法がはじまる。

供養内容は言うまでもなく精進料理である。ご飯とスープ、そしてキムチや山菜などが用意されるが、菜食の中でも唐辛子葱など刺激性のある草は禁じられる。ただ朝供のみはご飯の代わりにお粥が用意されるのが通例である。おかずは普通四種類ぐらいであるが、このお粥の時には二種類ぐらいになる。

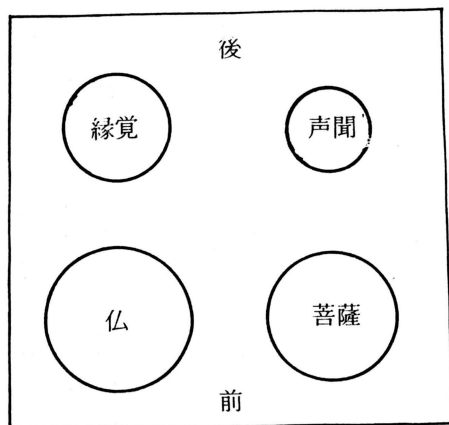
鉢盂は自分の席のある壁にならべられている。地上180 cm程度の高さに鉢盂置き(棚)が設けられ、その上に一列に整理される。僧団で私有物と認められるこの食器は、僧尼がつねに所持するものであるが、こうした仕組

みになっているのは、托鉢供養でなく自給自足として定着した寺院の歩みを物語るものである。

周知のごとく、鉢盂には石製(石鉢)・鉄製(鉄鉢)・陶土製(瓦鉢)・木製(木鉢)などいろいろな種類が数えられる。韓国では古来に鉄鉢盂がよく用いられたようである。高麗時代の青磁鉢盂が現存することから見ると、製品としてはかなりの種類があったろうが、贅沢を避ける沙門の間には、広く流行されたとは考えられない。現在、叢林では木製とプラスチック製が使用されている。

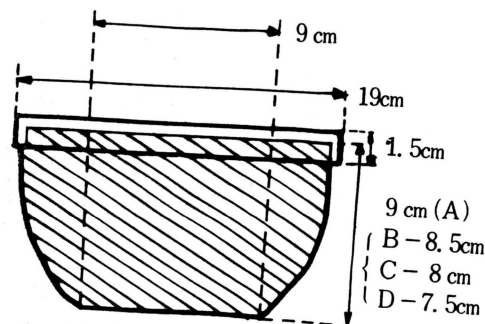
木製は主に銀杏・榛の木などが愛用され、漆(火漆)が塗ってある。漆は美しさと清潔感があると同時に、殺菌効果もあると言われる。鉢盂の三片・四片・五片などの中で、韓国僧伽では四片鉢盂と統一されている。これは〈表四〉で見ると、大きい方から仏・菩薩・縁覚・声聞を象徴すると言われ、各各ご飯・スープ・おかず・水と入れる。互いに間違っているのは徹底に禁じられる。

〈表四〉鉢盂位置と象徴

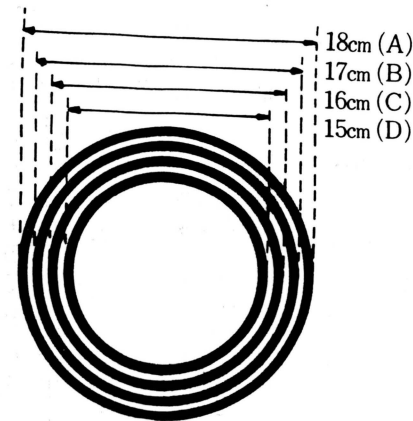


仏を象徴する〈表四〉A鉢盂を、特に「大鉢盂」または「Osiban」と呼ぶ。「大鉢盂」とはDの「小鉢盂」に対する呼び方であるが、「Os」が両親を意味する韓国中世語「Osi」と同音であるところに興味深い。この大鉢盂には塩分性のあるものを入れることはできない。従って、お茶は付は鉢盂A（大鉢盂）で可能であるが、五目飯の場合は鉢盂Bで可能になる。

〈表五〉鉢盂の形態



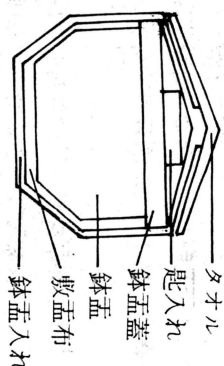
1. 畳んだ時の正面
* 数字は内側から測ったもの



2. 畳んだ時の側面
* 数字は外側から測ったもの

鉢盂供養に必要な道具は次の通りである。

- ① 鉢盂四片。プラスチック製の場合、〈表五〉のように、 $18 \times 9 \text{ cm} \cdot 17 \times 8.5 \text{ cm} \cdot 16 \times 8 \text{ cm} \cdot 15 \times 7.5 \text{ cm}$ のものである。さらに $19 \times 1.5 \text{ cm}$ の鉢盂蓋が付く。
- ② 匙と箸。布で作った袋（匙入れ）が付く。白色である。
- ③ 敷き布。供養、このふろしきの上に鉢盂をならべる。（表四） $42 \times 38 \text{ cm}$ ぐらいの水の洩れない白色あるいは灰色のものである。
- ④ タオル。供養の後、鉢盂の水分を拭き取るのに使う。
- ⑤ 鉢盂入れ。これを「鉢盂襟」と呼ぶ。 $80 \times 50 \text{ cm}$ ぐらいの布ふろしきである。両端は細く、中央は二重布になっている。普通は細長く折って（ 20 cm ぐらい）鉢盂を包むが、他寺などに移動する時はその中に鉢盂を入れて包む。



〈表六〉鉢盂の構成

〈表六〉が以上で述べた鉢盂ならび附属道具のすべてである。これは常住時の鉢盂を収めた形、つまり畳み包んだ鉢盂の模様である。叢林ではつねにこうした形態に、鉢盂が整理されているわけである。

四。鉢盂供養の作法

供養時間は大体「寺規」に定められ、厳しく守られる。従って、定められた大衆の供養時間以外の個別的な供養は許されない。供養作法を詳しくあらわした記録はないものの、つねに法度にあってゐる。不文律こそ、より徹底に守られるのが叢林生活かも知れない。釈尊時代からの鉢盂供養作法は、いわばもっとも久しい不文律とも言えよう。

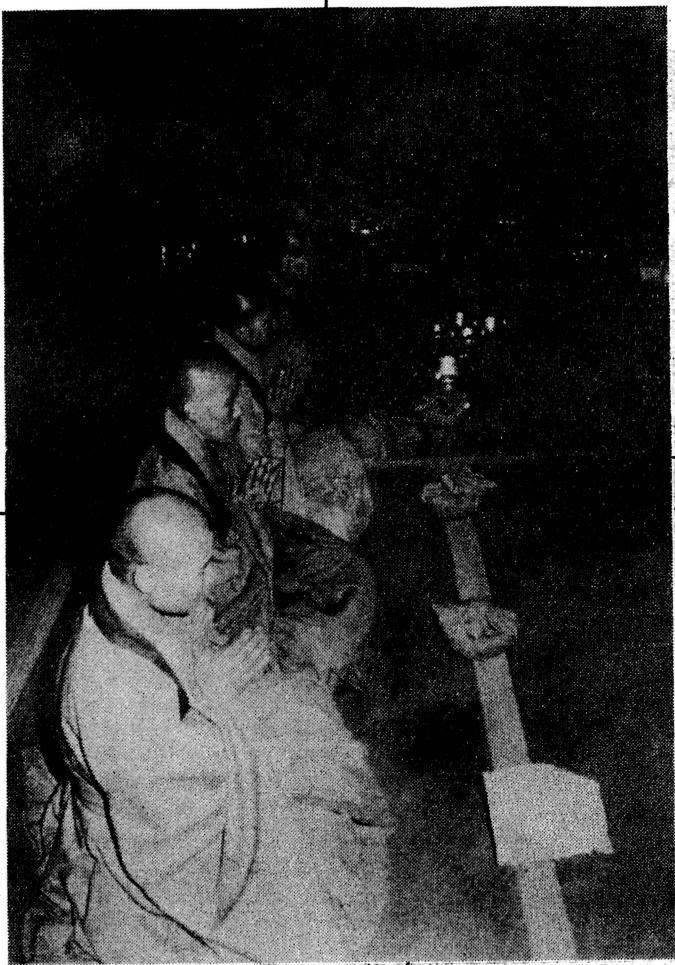
供養を知られる鍾が鳴ると、大衆は法衣、すなわち僧服「長衫」と言うに袈裟を掛けた姿で「大部屋」に雲集する。鉢盂棚の自分の鉢盂前に立った僧侶は、鉢盂に向つて合掌恭敬し、両手で丁寧に取り降し、席に戻つて正坐する。鉢盂は席の前に置かれる。

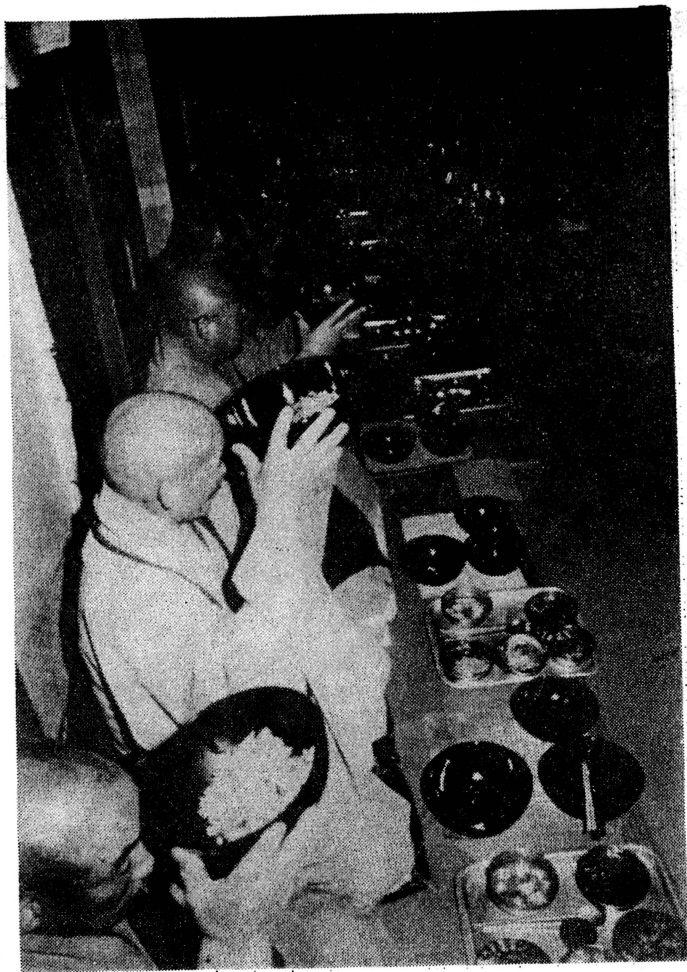
この間、沙弥僧らは自分の鉢盂を用意する一方、供養物を運び入れ、供養態勢が整えられる。供養大衆が全部席につくと、供養物は部屋中央に用意される。〈表三〉の①―③までがそれである。①―③は「下場大衆用であり、①―③は「上場大衆用である。前から水①①・ご飯②②・スープ③③の順である。

鉢盂供養に使う水を「鉢盂水」と称するが、普通の呼び方は「千手水」となっている。生水である。部屋の天井中央には、「千手陀羅尼」すなわち「神妙章句大陀羅尼」が貼つてあるが、それが鉢盂水に映されるところから付けられた清水の意味である。韓国寺院は一般的に風水地理説に基づいて択地されたと見てよからう。山川地勢の形局を観察し、深山窮谷の藏風得水之处を寺院の基地として択んだわけである。黄土や岩石の多い山谷にはほとんど清潔な水が流れるが、こうした風水法による寺院境域は山水がより優れ壮観をなしたところが多く、岩壁から流れる水を「千手水」と使用する例も少なくない。

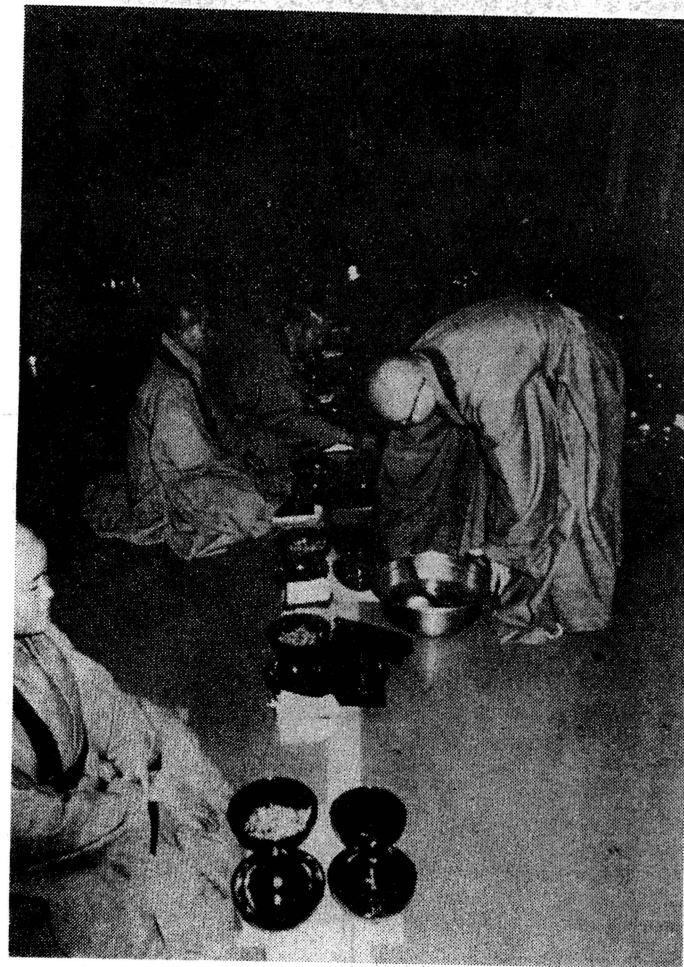
竹篋が三回鳴る。供養作法のはじまりである。執礼は爐殿かそれとも府殿の中で担当者が出る。爐殿は祖室和尚の左側に坐するのが普通である。竹篋の音に合わせて供養大衆は偈頌(後述)を誦え(写真一)、それが終る

〈写真一〉供養作法中の展鉢偈



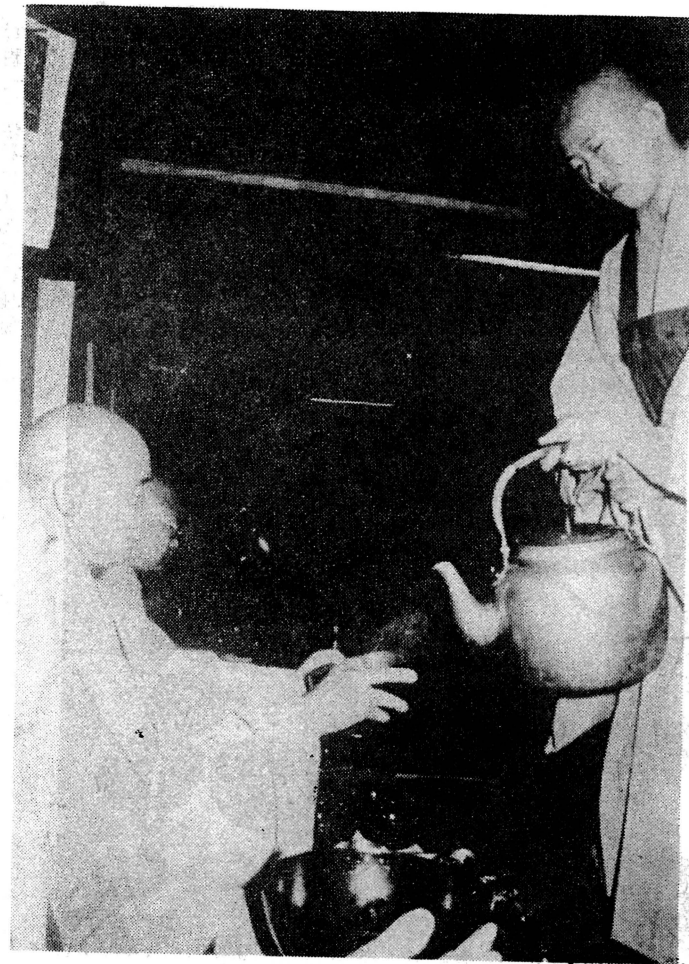


〈写真三〉 供養に入る前の偈頌

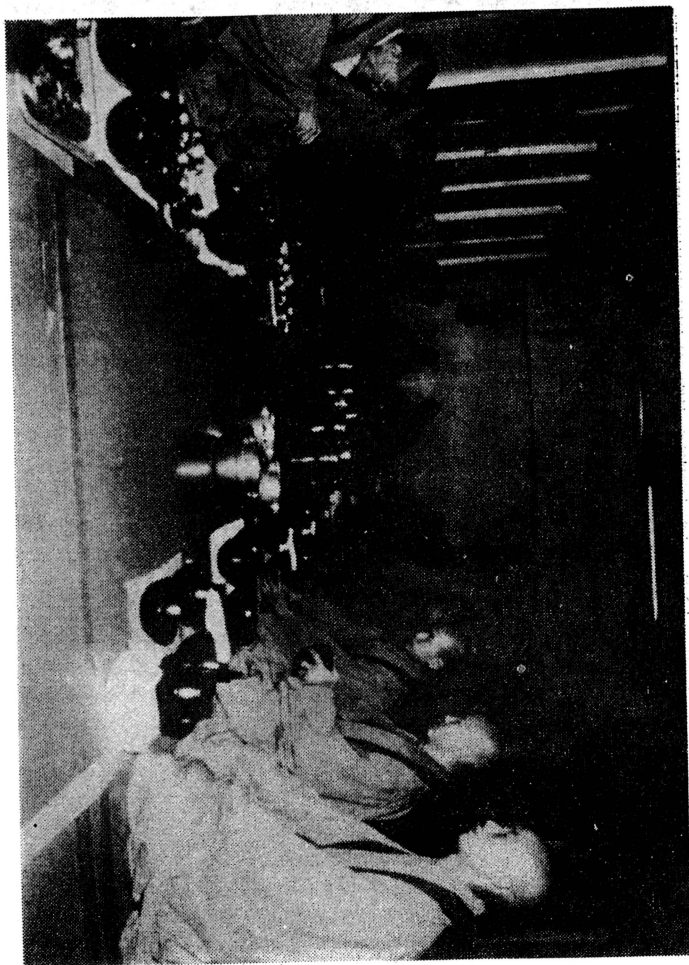


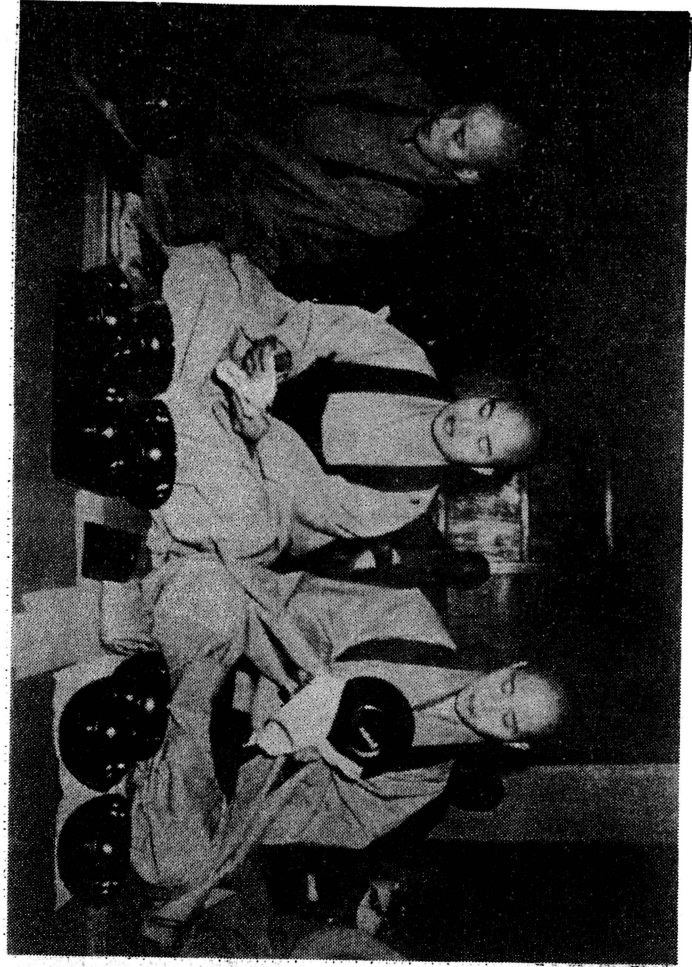
〈写真二〉 ご飯の後のスープ

写真四 給茶



写真五 供養の終るとき





僧侶の食事 (大鉢盂)

と同時に鉢盂を開く。(表四)作法は終始黙言の中で進行される。匙と箸は「小鉢盂」に置かれる。そして、右膝の前には下から鉢盂蓋・鉢盂入れ・匙入れ・タオル順に整理される。年寄りの僧侶には若い僧侶が手伝う場合が多い。鉢盂の持ち方は、両親ゆびを鉢盂内に入れ両手を使って抜き出す仕組みになっている。

鉢盂が開かれると「千手水」が回ってくる。(表三)のA地点から両方に進められる。水は「大鉢盂」に受け、鉢盂内をいっぱい回してから次のものに灌ぎ、最後に「小鉢盂」に置かれる。この水は鉢盂を洗うとともに、鉢盂供養物が付けられない役割りも果たす。

「千手水」回しが進められるにつれて、竹篋が二打され、ご飯が回される。水と同じ方向である。勤儉節約を主とする寺院では、一食は三合が正量である。従って正量を全部貰うわけであるが、その後「加飯」や「咸飯」の知らせがあり、自分に合わせて加減する。「加飯」は最近のことであり、以前は客僧が訪れる時、十匙一飯の「咸飯」が多かったようである。ご飯の後にスープがくる。(写真二)スープは七合が正量である。「千手水」とかスープなどの場合、自分の適量になると、鉢盂を側面に斜めにする。満足をあらわすしるしである。おかずは四・五人当に一つずつが用意される。幾つかのおかずから必要な量を鉢盂に取り入れる。

竹篋が三回鳴る。同時に「大鉢盂」を両手で持って面前にまで挙げ、偈頌(後述)を誦える。(写真三)それが終ると竹篋一打とともに供養がはじまる。ご飯もスープも、おかずをも残すことはない。終りごろになると竹篋が二回鳴る。お茶すなわちおこげ湯用意の知らせである。「千手水」と同方向に回される。(写真四)「大鉢盂」に受けたおこげ湯で、三つの鉢盂に残ったご飯とか塩分までを、奇麗に片付けて飲む。(写真五)供養が終ったことになる。

竹篋が二打される。「千手水」取り集めがはじまる。大衆は「小鉢盂」の水をもって「大鉢盂」から奇麗に洗い、「小鉢盂」に戻した後、「千手水」の入れものに灌ぐ。この順は最初配る時の方向とは逆になる。若い僧侶からはじまるので年寄りの僧侶はもうすこしの時間的余裕が与えられる。「千手水」の取り集めが終ると同時に、鉢盂に残っ

た水分をタオルをもつて完全に拭き取ってから畳み包む。(写真六)(表六)の形になるわけであるが、上にタオルを掛けるのは、鉢盂で拭き取った水分を蒸発させるためである。

このように鉢盂取めが終ると、公告時間になる。朝の場合、寺中運力とか特別事項が決議公告される。これを「大衆公事」と言う。「大衆公事」の時間には、後食としてお茶や果物などが出ることもある。これを「Chadam」と呼ぶ。「Chadam」は皿に入れられるが、供養と同時に出る場合は、鉢盂蓋が皿と使われる。

「大衆公事」が終ると、竹篋が二打されるとともに「偈頌」(後述)が誦えられる。回向である。「偈頌」の終了に合わせて竹篋が三回鳴り、大衆は合掌恭敬し、鉢盂を鉢盂棚に陳列する。陳列の後、合掌恭敬のあることは言うまでもない。こうして鉢盂供養作法がすべて終了することになる。安居の結制・解制とか、叢林の重要な法事のあつた時は、叢林大衆のみでなく、山内の末寺草庵の僧尼まで全部集まる。これを「山中供養」と言う。「山中供養」時に、各各自分の鉢盂を持参するのはもちろんのことである。この時は、大体供養の後「茶角」と名付く自由時間が設けられる。

前述の供養作法の偈頌⁽⁵⁾を一括すると次の通りである。

① 下鉢偈

執持應器當願衆生

成就法器受天人供

② 回鉢偈

佛生迦毘羅 成道摩竭陀

說法波羅奈 入滅俱尸羅

③ 展鉢偈

如來應量器 我今得敷展

④ 十念

願共一切衆 等三輪空寂
唵鉢多羅野沙婆訶

清淨法身毘盧遮那佛

圓滿報身盧舍那佛

千百億化身釋迦牟尼佛

九品導師阿彌陀佛

當來下生彌勒尊佛

十方三世一切諸佛

十方三世一切尊法

大聖文殊師利菩薩

大行普賢菩薩

大悲觀世音菩薩

諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅密

⑤ 受鉢偈

若受食時當願衆生

禪悅爲食法喜充滿

⑥ 五觀偈

計功多少量彼來處

付己德行全缺應供

防心離過貪等爲宗
正思良藥爲療形枯
爲成道業應受此食

① 生飯偈

汝等鬼神衆 我今施汝供
此食遍十方 一切鬼神供
唵侍利侍利娑婆訶

② 絶水偈

我此洗鉢水 如天甘露味
施汝餓鬼衆 皆令得飽滿
唵摩休羅洗娑婆訶

③ 収鉢偈

飯食已訖色力充
威振十方三世雄
回因轉果不在念
一切衆生獲神通

以上の中で、①―③までは鉢盂を開くとき、④は供養にはいるとき、⑤―⑦は鉢盂を収めるときの偈頌である。

五。結 び

以上で、韓国僧伽の鉢盂供養作法について、その現状を略述して見た。仏教の歴史と同じ長い伝統の鉢盂供養は、いわば僧団構造の原点を示唆するものと言える。従って、そこには姿のみでは読み切れない深い精神的文化的意味が込められている。さらに仏法の展開とともに、国や地域によって供養作法にも、少なくない出入りが考えられる。

こういう風に考えてくると、本稿は極めて限られた一部分を取り扱ったことがわかる。当面の課題として、日本寺院の供養作法との比較研究の必要も生じてくるが、これは本稿の訂正および補充する点と兼ねて、別の機会に譲ることにする。

註

- (1) 『広辞苑』、供養項目。
- (2) ハングル学会編、『大辞典』、供養項目。
- (3) 韓国仏教における講院の教育課程は、いまなお僧侶教育の主な役割りを果たすものである。この講院の学習については、蔡沢洙、「韓国仏教の伝統的学習教育課程について」、『印度学仏教学研究』一九一二、二六八頁以下を参照されたい。
- (4) 『釈門儀範』上、誦呪篇。四四二字の悉曇文字陀羅尼である。
- (5) 前掲書。もとは唱食偈・仏三身真言・法三藏真言・僧三乘真言・戒藏真言・定決道真言・慧徹修真言・奉飯偈・淨食偈・三匙偈・解脱呪までが誦えられたが、現在これらは省略されるのが通例である。

〔附記〕

本稿の中の写真資料は、吳光懺師（在米中）、より仏教大学図書館に寄贈されたものである。なお本稿が成るについては、仏教大学院金炳吉師の懇切な御助言によるところ大きく、ここに記して謝意を表したい。

（圓光大學校助教授・韓國全北裡里市新竜洞三四四一二）

煩惱所知二障と人法二無我の研究序説

李 平 来

一、

元暁は、彼の代表的な撰述というべき『大乘起信論疏』の中に於いてしばしば詳述を彼の他の著述、すなわち、『大乘起信論別記』⁽¹⁾、『楊伽經宗要』⁽²⁾、『不増不減經疏』⁽³⁾、『二障義』⁽⁴⁾などに譲っている所が窺えるのである。しかし、元暁の作品の大部分は逸散して現存しない。幸いにして『二障義』の写本が横超慧日博士によって一九四〇年頃大谷大学の図書館から発見されたのである。

煩惱所知二障と人法二無我は、大乘仏教においては思想的に大きなかめである。それだけに、元暁の『二障義』の発見は仏教学界において一大曙光であったと考えられる。

なぜならば、煩惱障所知障の二障と人法二無我説は、印度大乘仏教においては小乗に対する大乘の優越性を示す教説であるので、小乗と大乘とを区別する用語として重要な意味を持つといえるでしょう。この思想はたしかに瑜伽唯識学派によって完成されたのである。それが中国、韓国、日本に入っどのように理解され、教学形成にどれほど影響を与えたかを探る場合、元暁の『二障義』は貴重な資料であると思われる。

又、横超博士が、「彼の撰述にかかる他の経論の疏と異なつてこれは元暁の仏教観を全体的に知らしむる如き内容を持った著述であるが故に、それ自体としてもさる重要視さるべき文献といわねばならぬ」と指摘した